

令和元年度 教頭専門部会県外視察研修会報告書

1. 研修目的

- (1) 地域にあって、明確な建学の精神のもと特色ある教育を行っている2つの学校を視察する。
- (2) 昭和39年に中高一貫教育を取り入れ、その後も絶えず学校改革を続けて、教育課程により高い進学実績と幅広い生徒を受け入れている高田中学・高校を視察する。
- (3) 宗教教育に基づく地域に根ざした教育活動に加え、ICTを活用したアクティブラーニングやグローバル教育に力を入れている皇學館中学・高校を視察する。

2. 期 日 令和元年5月29日(水)～5月30日(木)

3. 参加者 静岡県私立中学校・高等学校の教頭等 19名

4. 視察・訪問校

- ① 高田中学校・高等学校 校長 梅林久高先生
三重県津市一身田町2843番地 電話059-232-2004
- ② 皇學館中学校・高等学校 校長 上村桂一先生
三重県伊勢市楠部南138 電話0596-22-0205

5. 研修行程

<5月29日(水)>

浜松駅 → 浜松西 IC → 芸濃 IC → 高田中学校・高等学校視察 → 津 IC → 玉城 IC →
→ ホテルルートイン伊勢 → 懇親会 → 宿泊(シングル朝食付)

<5月30日(木)>

ホテル → 皇學館中学校・高等学校視察 → 伊勢神宮内宮 → 伊勢西 IC → 浜松駅

参加者

浜松学芸	内藤 純一 校長 (部会長)
浜松学芸	原田 豊治 副校長 (副部会長)
御殿場西	大塚 勇介 教 頭 (専門委員)
加藤学園暁秀	岩城 直己 教 頭 (専門委員)
東海大静岡翔洋	橋口 祥一 副校長 (専門委員)
静岡大成	山田 隆司 教 頭 (専門委員)
浜松学院	村松 俊明 副校長 (専門委員)
日本大学三島	井上 雅晴 教 頭
沼津中央	井出 朋之 教 頭
加藤学園	岡本 謙治 教 頭
星 陵	下村 博寿 副校長
静岡サレジオ	岡田 一彦 教 頭
静岡北	大橋 久夫 教 頭
焼 津	知久 一文 教 頭
藤枝順心	市川 滋久 教 頭
島田樟誠	狩野 泰 教 頭
磐田東	影山 英史 教 頭
浜松日体	藤森 章弘 教 頭
私学教育振興会	鈴木 藤一 事務局長

以上 19 名

日時：令和元年5月29日（水）13:30～15:30

視察校：高田中学校・高等学校（三重県津市一身田町 2843 番地）

沿革：学校の前身は、親鸞聖人が開祖である真宗高田派本山専修寺に220年前に開かれた勸学堂であり、僧侶の子弟育成の場であった。昭和22年に中学校、昭和23年に高校、昭和39年に現在の中学校高等学校一貫6年制を開設し、現在に至る。

校訓：言行忠信・表裏相応

言行に誠意があつて表裏無く、己をいつわらず、他をいつわらない

生数：中高6年制 5クラス 190名

高校3年制 11クラス 380名 合計 2,386名 男女比は同程度。

部活動への加入は81%を越える、行事なども中高一緒に活動している。

進学：6年制で20名の東京大学合格を出したこともあり、注目された。

コンスタントに東京大学、京都大学の合格者を出している。

3年制も30名以上の国公立の合格を得るようになって評価されている。

高校は同じカリキュラムを使っている。

教職員：専任211名、非常勤49名

定年は60歳、65歳まで延長可能、その後非常勤として70歳まで採用できる。

その中には公立からの先生も含まれる、離職率は低い。

教員の半数は卒業生である。英数国の質の高い先生を確保したい。

募集：少子化は三重県でも大きな問題である。地域間格差、都市部への人口集中がある。

私学は12校あり、公立と私立の生徒配分は8：2でこれを崩したい。

北は名古屋へ、西は関西への流出が問題となっている。

逆に本校は愛知県からの受験生（150名）・入学生（10名）を増やそうとしている。

立地としては、津市街地からは離れているが、最寄りの駅が3つもある。

私学同士の生徒の奪い合いが激しくなり、生き残りをかけた戦いとなる。

公立には負けられないようにしたい。

中学校募集は、9月に説明会を実施し500名参加、他にも小学校4年・5年対象の学びの広場を年3回実施150名が毎回参加、受験生は700名を集める。

高校募集は8月に見学会に1,500名参加、その2部で保護者対象の説明会を実施、このスタッフを全て生徒のボランティアで運営、個別の見学会は年3回実施、毎回350名を集める。

高校独自の返金不用の奨学金制度を持っている。200名に1,200万円給付。

課題：1. 少子化問題と地域社会との連携

2. 学校のICT化、大学入試改革への対応、カリキュラムマネジメント

ICT環境 Wi-Fiあり、プロジェクターあり、各自のスマホ利用可、

G-suiteやClassi、クロームブックの活用を進めている。

パソコン室と貸出用のパソコンは十分用意してある。

英語教育環境 6名のネイティブ教師によるコミュニケーション指導を実施。

オーストラリアやイギリスとの留学交流。

3. 教員の資質向上

4. 三重県独自の風土と学校経営（官尊民卑）

5. 塾との共存共栄の模索（塾は県外を目指せと指導している）

6. 3S 信頼・育てる・進路に重点を置いた指導

その他：プラネタリウムを校内で見ることができる。

Classiを利用した授業では、スマートフォンに小テストを送信して解答していた。

スマートフォンは授業中のみ利用可能、ゲーム利用は取り上げ。

制服の多様化を実施しており、女子のスラックス、ネクタイ採用した。

視察を終えて、施設は現在も拡張しており、益々充実し、ゆったり作られていた。その中で生徒は伸び伸び、おおらかに成長している印象を持った。また、県内随一の進学実績で一定の評価を得ており、広く信頼を受けている様子が伺えた。このことが生徒募集において、今後の少子化の時代にも勝ち抜くことができる要因になると思われ、大いに参考となった。

第2日目 視察報告

記録者 加藤学園暁秀 岩城 直己 教 頭

明治35年神宮祭祀が「伝統文化を学び社会に貢献せよ」と神宮皇學館を創設する。翌年、官立専門学校となる。昭和15年文部省所管となり官立大学へ、さらには、初代総長吉田茂、2代目岸信介を迎えた皇學館大學に至る。その後、昭和38年皇學館高校、昭和54年皇學館中学が開校された。現在、高校生1079名、中学102名である。敷地は広く施設は充実。中学は学年2クラス。1クラスは17人規模の少人数である。

上村校長先生のお話では、現在2つの課題あるとのことで、

- ① 高大接続について、ハード・ソフト両面での改革が急務であること、
- ② 伊勢志摩の人口減に対しての危機感があることを挙げていました。

対策としては、教員の参加型研修やワークショップなど、大学から講師を招いてスキルのアップを心掛けたり、ICT教育推進に力を入れ、各教室への電子黒板付きプロジェクターの配置、LAN環境の整備、共用タブレットを91台使用、また授業の80パーセントにICTを取り入れるという具体的目標を持っている。その結果、ICTの活用で板書する時間を短縮し、プリント教材やグループワーク、ペアワークを行ない、生徒がスライドを用いてのプレゼンをするなどアクティブラーニングと授業の進行の両立ができています。

皇學館のイメージとしては神道を学び、人とのつながりを重んじたり、人権学習をする特別な授業をカリキュラムに取り入れることは容易に想像できたが、その一方でグローバルな人材育成にも相当力を入れており、日本人としてのアイデンティティを持ちつつも海外の文化も理解し、交通の便が決して良いとは言えない伊勢ではあるが、「日本人の精神を持った国際人」の育成を目標としている。

英語学習プログラムのバリエーションとしては、

- ① 英語の時間数が多い（会話主体の授業・ホールイングリッシュという時間を授業コマにしている）
- ② 放課後のカンパセーションプログラム
- ③ 中学English Camp 3日間
- ④ 伊勢ガイドツアー
- ⑤ オーストラリア姉妹校とスカイプ会話
- ⑥ タイ「インターネットとフレンドシップ校と交流」両校、英語は第2外国語である。
- ⑦ バーチャル英会話（学研エデュケーショナルを利用）
- ⑧ カナダ短期研修 Rosehill Secondary College との交流
- ⑨ ニュージーランド短期留学

その他、伊勢志摩サミットの時、外務省の方からサミットの概要や意義を学んだり、俳句の指導を著名な方に依頼する等、特色のある講座を行っている。